

一粒怪談

神沼三平太

戌一刻

湯にくねるもの

湯を注ぎつつ湯船に入っていたら、「ぼしゃっ」と重いものが湯に落ちる音がした。見回しても何も無く、変だなと思いつつ湯船から出て頭を洗う。すると今度は「ぼしゃん」と水を打つ音がする。泡を流しつつ頭を上げて目をやると、湯船に透明の固まりがくねっていた。すぐ湯を抜いた。

皆勤

Tさんが子どもの頃の話。通学路から外れた道に、毎朝白い服着た女の子が立っていた。その子と目が合った日は、学校に行かずに遊びに行ったのだという。知らない公園や林、砂山などを巡ったのを覚えている。だが、後日知ったことには、通知表には「皆勤」の印が捺されていたという。

ばんばん

夜下宿で寝転がっていたら、ばん！と畳を叩く音がした。ばん！ばん！ばん！と何度も叩くので、「うるせえ！」と声を荒げた。一瞬音が止んだが、さらに激しく叩き始めた。これは何かあると思い、「わかったわかった」と夕食を食いに出かけた。戻って来たら下宿は全焼していたという。

言うなよ

早朝にKさんが見た老人は、不健康そうで薄汚れた姿だった。服のポケットが妙に膨らみ、ネズミか何か入ってるように、もぞりと動いた。「え？」と思うと、小さく細い手が出てきた。「人の手だ」と思った時、老人がポケットをばんと叩き、こちらを向いて「言うなよ」と告げたという。

出

Nさん宅の近所の新築マンションの、白く煌煌と光るエントランスホールに、深夜二時頃、「なにか」が出るのだという。それは白いプラスチック製のような体で、一メートル程の高さだ。漢字の「出」のようなポーズで、每晚深夜にホールを動き回り、ガラスを内側から撫でているという。

戌二つ刻

学校のエレベータ

ある学校のエレベータに乗ると、十二階まで連れていかれることがあるという。実際は九階までだが、九階で降りずにいると扉が閉まり、さらに昇るらしい。十階は誰もいない廊下で、ずっと扉が続いている。十一階は黒い人が動き回っている。十二階は暗い小さな部屋で女がいるという。

異生物

寝ているとしゃりしゃりとリンゴを齧るような音が小さく聞こえた。起き上がってその音を辿って行くと、小魚に手足が生えている何か異様な生き物が庭で何かを抱えて、それを無心に齧っていた。わっと声を上げたらぴょんぴょん跳ねて茂みに消えた。後には小さな鱗が残っていたという。

ちょっと分けて

山手線で隣に立った男が馴れ馴れしい口調で「それちょっと分けてくれよ」と肩を指して言った。肩には何も乗っていない。何だこいつはと思ったが、「サンキュ」と言って男は降りていった。それ以降色々調子が悪くなり、知り合いの霊能者に相談したら幸運を持っていかれたのだという。

革靴

用務員Kさんの学校の地下には、三十年の間使われていない教室がある。ある日火災報知器の点検で中に入った。荷物も無く、がらんとした教室。その中央に揃えられた女子の革靴があった。作業している間、その靴の上に、首から下だけの半透明の少女が正座しているのが見えたという。

忌箱

後輩のKの話。下宿の天井裏から和紙の貼られた古い箱を見つけた。大きさは両の拳を合わせたぐらいで、意外と軽く、振っても音はしない。鑿と金槌でその箱を割ってみると。中は髪の毛や爪がごっそり詰められており、その中心に読めない文字がびっしり書かれた札が入っていたという。

戌三つ刻

顔の音

高校生Aさんが帰宅途中に見たもの。近所の四つ角を曲がったところから、金属の棒を引きずる音ようなが聞こえた。何を引きずっているのかなと思いながら角を曲がって息を飲んだ。すぐ目の前に巨大なつるりとした男の顔が浮いていた。それが道にぶつかる度に音がしていたのだという。

時間の合わない部屋

Yさんの家では時計がすぐに狂うのだという。電波時計もいくつかあるが、そのどれもが正しい時間を指していない。夜中になると同時に全ての針が動き出し、まちまちの時間を指して止まるのだという。「ほかにもいくつか時計持っていますけど、どれも信用できません」といって笑った。

親不知内長髪

Tさんの話。歯医者から抜いた親知らずをもらって帰ったという。虫歯で穴が開いていたので虫眼鏡で覗き込んでみた。すると中に黒いものが固まっている。何だろうとピンセットでほじくると、細い糸状のものだった。引っ張り出してみると、それは長い長い一本の髪の毛だったという。

擦り合う音

当時のKさんの下宿では時々ハサミの音がした。時々気づくと金属をこする音がする。気になったが、害もないので放っておいた。だがある夜、寝ているすぐ耳元で金属が擦り合う音がした。ジイイ、シャキン、ジイイ、シャキン。これはやばいと部屋を飛び出しすぐに引っ越したという。

死を招くもの

M氏の母親が亡くなる数日前、M氏は夜中にトイレに行こうとして息を飲んだ。廊下の先に天井まで届く背で、ぶよぶよした巨大な頭をした何かがあった。声も出せないまま見ていると、それはゆっくり歩いて母親の部屋の前で消えた。M氏は「あんなのがいたらそりゃ人も死ぬわ」と言った。

戌四つ刻

戻ってみたもの

ある旧道のトンネルに出るといふ噂を聞いたTさんが、友人と肝試しに行った時の話。車から降り、トンネルを往復する。何も起きず、ほっとしたその時、友人が声を上げた。残した車の上に何かがあった。猿とも人とも言えない何か車が車の上に座っていた。それはそのまま闇に消えたといふ。

半透明の何か

Nさんの話。冷たい雨が降る夜、コンビニから自宅に帰る途中で奇妙なものを見かけたといふ。街灯の光の下で何かもぞりと動いた。最初は蛇か何かかと思ったがどうも違う。半透明のクラゲのような何かだった。それはゆっくり道路脇の溝へと動いていき、ぼちゃりと落ちて消えたといふ。

ハロウィンの夜に

ドイツに留学していた友人の話。ハロウィンの夜に、下宿のダンスから着飾り仮面をつけた小人たちが列を作って窓から出て行った。その数十五体から二十体。各々手に鋏や針を持っていた。夢かと思ったが、翌朝、窓枠に小さな足跡がついていたので「本当だったんだ」と思ったといふ。

歯形

ある日Mさんは天袋が少し開いているのに気づいた。閉めようとしても何か引っ掛かっているのか動かない。仕方なく指を隙間に突っ込み、引っ掛かっているものをずらそうとした。指を突っ込むと同時に指に痛みが走った。「痛っ！」と引っ込めたその指先には、小さな歯形がついていた。

手長の女

友人からの電話を受け、急いで彼の下宿に向かった。窓の下に変な女が居て、ずっとこっちを見ているという。様子を伺うと、庭に異様な風体の何かがあった。薄い体にコート姿。異常に長い腕を2階の窓に伸ばしている。わあと言ったらこちらを向いて目と歯の無い口を大きく開けて笑った。

亥一つ刻

落ちた！

福岡県のあるオフィスの窓からは、稀に向かいのビルから人が落ちるのが見えるという。見えるだけで実際にそのビルから飛び降りがある訳ではない。だがそのオフィスの社員や客が、数年に一度は「落ちた！」と叫ぶことがあるのだという。なお心当たりは社長以下誰にも無いのだという。

地下鉄構内を歩くもの

当時の営団地下鉄の社員から聞いた話。終電も終わった、誰もいないはずの地下鉄の構内を、見上げる程に大きく、足が2本生えたぶよぶよの肉の固まりが、ぺたりぺたりと歩いていることがあるのだという。それが出た後には、人身事故が起きるので注意しろと先輩社員に言われたという。

つむじ風

自転車で走っている時に、肩を掴まれる感覚があった。バランスを崩して倒れそうになると、びゅうと強い風が吹いて体勢が戻される。しばらく走るとまた同じように肩を掴まれてバランスを崩される。何度か繰り返した後に、自転車から降りると、足下からつむじ風が去って行ったという。

タトゥー

首の後ろに女性の顔をタトゥーで入れた男がいた。最初は良かったが、次第にその表情が変わっていると仲間内で話題になった。男は気にしてその顔を隠すようになったが、次第に体調も思わしくなくなり、臥せがちになった。ある日鏡に映して確認すると、般若の顔に変わっていたという。

半透明の柱

Kさんが友人と会合を終えて帰るときに、町内の家の庭に黒い半透明の柱が立っているのを見た。「やなもの見たな」と思い、帰って奥さんに「近いうちに葬式が出るかもしれん」と告げたという。数日後「ねえ、なんで知ってたの？」と奥さんに言われて「ああやっぱり」と思ったという。

亥二つ刻

臭い口

夢の中で擦過音が繰り返し聞こえ、目を覚ます。体が動かない。闇の中に歯を剥き、「にいつ」と笑った口が浮いていた。息が漏れる音が聞こえる。それがひどく臭い。その口は次第に近寄って来て、大きく開いた。中は漆黑。記憶はそこで途絶えた。朝、顔に異臭を放つ歯形が残っていた。

番犬

国道から一本入った道の奥に廃屋がある。敷地は広く木で覆われているが、珍しく荒らされていない。夜、心得ぬ者が肝試しなどで敷地に入ると、どこからか野犬が集まって来て取り囲まれるという。近隣の人は犬の鳴き声を聞くと「またか」とは思うが、犬の姿など見たことも無いという。

香炉の部屋

ある大工の方から聞いた話。家を建てた後に、家の中心の小さな部屋の四方に壁を立てるように言われた。当然四方を壁で囲ったら中に入れなくなると告げたが、施主はそれでいいと言う。新しい畳の部屋の中央に香炉が一つ置かれていた。それもそのままだと念押しされて塞いだという。

紙人形

同じ大工の方から聞いた話。旧い家の取り壊しの時に、ある部屋の壁の中から、紙製の人を象った紙がばらばらと出て来たことがあった。それらは几帳面に折り畳まれ、一枚一枚に経文が書いてあった。その時一緒に作業していた年寄りの大工がいきなり念仏を唱え始めた方に驚いたという。

銭降り

Bさんが学生時代の話。部屋で「足らんなあ」と、銀行の残高を見ながら呟いた。すると畳に何か固いものが落ちて転がった。硬貨だ。そのあと、天井から数枚の札と、数枚の硬貨が降って来た。だが、その金を使うのは怖いので、神社に持っていった。日払いのバイトで何とかしたという。

亥三つ刻

ずっ

十三階建てのマンションの最上階に住むAさんの話。ある日外出をしようと玄関に行くと。ドアの自分の胸ほどの高さのところに、白髪の手がはみ出していた。明らかに誰かの髪の毛だが、覗き穴から見ても誰もいない。勇気を出してドアを開けようと近づいた時、外にずっと抜けたという。

黒穴

Tさんが子供の頃に見たもの。林の中で男が掘った穴に、真っ黒な何かを次々に投げ込んでいく。大きさは猫ほどで麻袋に一杯程もあった。その日は逃げ帰ったが、翌日友達とその場に行く、穴がぼっかり空き、底には僅かに黒いべっとりとして臭いものが溜まっていただけだったという。

足裏

Nさんの見たもの。総武線快速で足を組む青年の白いスニーカーの底に、顔があった。しょぼくれた中年男のもので、最初はそういう冗談のようなデザインかと思ったという。だが、その顔はしばらくするとあくびをし、ぶつぶつと何かを呟き、Nさんに気づくとニヤリとして消えたという。

アルバム

Yさんが子供の頃、家に封じられたアルバムがあったのだという。写真をアルバムに貼った時にはいなかったはずの子供の姿が写真に写り込むようになり、ついにはアルバムのほとんど全てにその子供が写ったのだという。両親は悩んだが、相談して菩提寺に引き取ってもらったのだという。

踏切

その路地がヤバいのはすぐ気づいたという。視線を感じる。何者かが近寄ってくる。Kさんは「ヤバい」と思いながら歩き始めた。鳴り続ける踏切。遮断機が上がり、同時に走り出す。「奴ら」は踏切を渡れないようだ。「ありゃ踏切渡れないから溜まっちゃってんだ」とKさんは言った。

亥四つ刻

消えた女

年末、Sさんは行き倒れの女性を拾った。飲み過ぎで意識がない。半身を雪に埋め、放置しておいたら凍死だ。公衆電話から救急車を呼んだ。冷えた身体をベンチに横たえ、ホットの缶コーヒーを脇に入れる。だが何度か自販機を往復する間、女性の身体は消え、服だけが残っていたという。

逆さ富士

関東に住むSさんが見た光景。正月休みの早朝、東の空に逆立ちの大きな富士山が見えたという。まるで蒼穹をスクリーンにしたように、真っ白に雪を冠った富士山が、上下逆さに堂々と空に浮いていた。気になって西を見ると、本物の富士山が見えた。振り返るともう消えていたという。

腐れ頭

夜部屋に帰ると、中から生ゴミの腐ったような臭いがした。「ゴミは出したはずなのに」と思いながら居間の明かりを点けた。蛍光灯の下に黒いいびつな球が浮いていた。腐った人間の頭だった。それはぐるりとこちらに向き直り、床に落ちて広がった。しばらく臭いが取れなかったという。

灰顔

もう二十年程前の話。Kさんのアパートでは、外に洗濯物を干す度に、黒い灰のようなもので染みが付いたという。白いシャツは特に目立つので、「いやだなあ」と思っていた。ある日、この黒いものは何だろうと虫眼鏡で覗いてみた。それは全て苦悶の表情を浮かべた人の顔だったという。

ふすまの裏

旅行先の旅館の部屋が異様に寒い。暖房を点けても体感温度が変わらない。一人が「この部屋ヤバいかも」と、厄除け札が貼って無いか探し出した。しばらくして「ねえ、これって」ともう一人が絶句した。ふすまの裏にびっしりと経文が書かれていた。すぐに部屋を変えてもらったという。

子一刻

返ってくる絵

画商のKさんの倉庫には、店頭に出さない絵が何枚もある。その一枚に、何度売っても戻ってくる絵があるという。女性を描いたもので、一見変哲もないが、今まで所有した人は皆不審な亡くなり方をしている。あまりに何度売っても戻ってくるので、ついに市場に出すのは諦めたという。

空き間の足音

Mさんのアパートの隣が空いたが、人の気配が続いた。声はしないが、部屋の中で足音がする。ある朝、その部屋を挟んだ向こうの部屋の住人とその話になり、やはり物音が聞こえるとのことで、大家立ち会いで検証することになった。部屋には覚えのない携帯電話が一台落ちていたという。

導き犬

Iさんが中国地方の山でハイキング中、まっすぐ林道を歩いていたはずが、沢に下りてしまい、戻れなくなった。日が落ちて肌寒くなり、焦り始めた。気づくと少し先に白い犬がいて、二本足で立って手招きをしている。Iさんは驚いたが、犬の指示通り後ろをついていくと里に出たという。

壺

Nさんの実家の蔵には、不思議な壺がある。高さは六十cm程で、内側は覗いても底が見えないほど真っ黒で、中で小さな青白い光がくるくと飛んでいる。話によれば、それは死者の魂なのだという。その光は年に数度そこから飛び出し、何処かに飛んでいき、また戻ってくるのだという。

肩を組む

「普通の人は見えてないんですが、まあ、どこにでもいますよ」とKさんは言い、「だから僕は自分が見てることは、あまり言いたくないんです」と続けた。「ここにも？」と尋ねる。「正直に言いますよ？」とKさん。首肯すると。「今あなたの首に腕を掛けて聞いてるんです」と言った。

子二つ刻

香典袋

Ｙさんの家に遊びに行った時の話。郵便受けを見に行ったＹさんが「これ、何だと思う？」と涙目になって差し出したのは、握られたように歪んだ香典袋の束だった。「これは警察かなあ」と二人で警察に届けたが、担当にぎよっとされた。何故そんなことがあったか今も分からないという。

まだ逢えませんか

Ｊさんの話。夜目を覚ますと女が枕元に座ってじっとこちらを覗き込んでいる。身体は動かない。しばらくすると頭の中に「まだ逢えませんか」と声が響く。そんな夢を年に何度も見た。そして十年以上経って、街でどきりとした。その女がこちらをじっと見ていた。今も時々見るといふ。

研究室の夜

Ｄさんの話。大学の研究室に泊まってデータ分析をしていた時、ドアを軽くノックする音がした。同じように大学に泊まっている奴が来たのかなとドアを開けるが、真っ暗な廊下だ。頭をひねって席に戻り、作業を続ける。そんなことが夜に何度もあった。先輩に聞くとよくある事だといふ。

呪石

Ｎさんの友人が海で石を拾ったのだという。以来、運が悪いし体調も悪い。ついに友人の間で「お祓いでも受けたら」と言われるようになった。Ｎさんがその石を見せてもらおうと、だいぶ波に削られてはいるが、「呪」と読めた。早速その石はお寺に持って行って供養してもらったといふ。

お盆の夕暮れ

Ｋさんの近所のおばさんに聞いた話。お盆の夕暮れには、見えない火の玉が無数にくるくると行き交っているのだという。しばらくすると一つ、また一つと方々に飛び去って行く。だが最後まで残って巡り続けるものもある。それは「帰れない人」で、もう次の盆には戻って来れないといふ。

子三つ刻

カラオケボックス

Kさんが学生の時の話。友人とカラオケボックスで歌っていると、歌声に別人の声が被りはじめたという。それに気づいたのか、次第に予約を入れる人が減り、ついに部屋がシーンとなった。その時突然誰も予約していないチェッカーズの「涙のリクエスト」が流れて場が騒然としたという。

針金女

Dさんが後輩から相談された時の話。後輩のもとに変なものが時々来るらしい。「紙...いや影？ 薄くて細くて、高さ一メートルぐらい。じっとしてるかと思ったら...すぐ近くにいたり」と言い、「あ、います。そこに」と続けた。彼女の指差す先には針金のようなものが立っていたという。

二重写し

Nさんが彼氏と別れた時の話。初デートの間、彼氏がちらちらと変な目でこちらを気にする。どうしたのかなと思い、帰り際に理由を尋ねた。すると「お前の後ろに、半透明でお前そっくりの女がもう一人いるんだよ。お前怖すぎるからもう逢いたくない」と言われて破局したのだという。

トイレの男

Sさんが一人暮らしのアパートで酒を飲んでいる時に、トイレに行きたくなった。ふらつく足でトイレまで行き、ドアを開けると、一人の男が座っていた。「あ、失礼しました」と言ってからおかしいと気づいた。もう一度ドアを開けたところ、誰も居なかったが、気配が残っていたという。

四方より掌

Sさんが高速道路のサービスエリアで寝ていた時の話。コンコンと軽く窓を叩く音がした。ん？ と思って頭を上げたが、特に誰かが立っている訳でもなく、気のせいだともう一度寝直すことにした。その瞬間バチバチバチバチッと無数の掌が四方の窓ガラスに音を立てて張り付いたという。

子四つ刻

車内に人が割といるにも関わらず、何故か人が車両の一方にしか乗っていない。ガラガラの方に歩いていくと、だんだん温度が下がってくるのが分かる。次第に気分も悪くなっていく。「ああ、なんかいるな」と思い、引き返す。その場に慣れてくると黒い人が集団で乗っているのが見えた。

明るい廃墟

Tさんが小学校の時の話。近所に廃墟があったので、放課後に友人数人と探検に行った。崩れた軒下から中に入っていくと、意外と奥の方は荒らされていない。窓ガラスからの光が入って、部屋の中は明るい、埃だらけだ。奥の襖を開けると、座敷にお地蔵さんが何体も立っていたという。

机の下

Aさんが大学時代の話。夜、試験勉強をしていると視線を感じる。振り返ってみても当然何もいる訳でもない。怖いと思うほど、余計に怖くなった。ただ、気のせいだと自分を言い聞かせ、ふうとため息をついた。その時気づいた。机の下に子供がうずくまって下から覗いていたという。

目の裏から

Nさんの話。目の奥が痛むので眼科に行った。眼球の裏に異物があるという。取ってもらって「何が入っていたんですか？」と聞くと、「髪の毛でした。時々ありますね」とこのと。興味本位で見せてもらって驚いた。長い髪の毛だった。そんな長い髪の毛には全く覚えがなかったという。

花揺

Yさんのお母さんが亡くなった時、兄弟で葬式で寝ずの番をしていると、風もないのに供花が揺れた。それもピン、ピン、と指先で弾いたように揺れる。「ありゃ、お母ちゃんがやってんだな」と思い、他の親族にも声をかけて、その光景を夜が明けるまで、みんなでずっと観ていたという。

丑一つ刻

神隠し注意

ハイキングの道すがら、「神隠し注意」という看板を見かけた。下山してから民宿で「この時代に神隠しなんて」と笑っていたら、その民宿に来ていた老人が「笑うもんじゃない」と言った。口調が深刻だった「あったんだよ。あったんだから仕方ないじゃないか」僕たちは黙ってしまった。

ひらひら

ある夜、Mさんが酔っぱらって帰宅中、ショートカットしようとして、空家の敷地を通り抜けようとした。階段を上がって降りればぐるっと周るより近い。あとは下るだけというところに来て、足がすくんだ。階段の段のところから白い掌がひらひらと舞っていた。すぐに引き返したという。

家憑きの子

Tさんの話。K駅から歩いて十分の所に格安で借りた家は、入居した時から何となく暗い印象があった。廊下の辺りから誰かが見ている気がする。時々ぱたぱたと走る足音もする。ある朝、起きたら子供に顔を覗かれていたが、目の辺りが真っ黒だった。えっと瞬きをしたら消えたという。

虫の知らせ

Oさんのお母さんが深夜にがばっと起きて「電話しなきゃ」と呟くと、突然電話をかけ始めた。家族は夜中にどこに電話するんだと訝しんでいたが、「ああやっぱり」とお母さんは電話を切り、家族の方に向かって、「今、お母さんが亡くなりました」と言った。夢で知らされたのだという。

三月上旬墨田区にて

墨田区での話。三月上旬、深夜コンビニまで行く途中で、まだ二歳ぐらいの子供を連れた女性を見た。だが服装がおかしい。モンペ姿でとぼとぼと歩いている。子供も押し黙って、声を掛けられるような雰囲気ではなかった。どうしてかとも思ったが、日付を思い出して手を合わせたという。

丑二つ刻

お届けものです

深夜二時過ぎにドアのチャイムが鳴ったので、訝しがりながら出ると、「Amazonさんからお届けものです」といわれた。こんな時間にあり得ないよなと思いつつ、ドアを開けると、やはり誰も居ない。翌日営業所に電話を入れると、「今日はお届け物はありません」と言われたという。

呑みかけ

先述のTさんの話。その家では独りでビールを飲んでいる時、空にしたはずの缶を持ち上げると、まだ中身が半分くらい残っていることがある。一回なら勘違いで済むが、三回同じことが繰り返されると、何かが悪戯しているとしか思えない。ただ毎晩のように起こるのですぐ慣れたという。

雨の夜

Kさんの部屋には、雨の夜になると女性の霊が尋ねて来るのだという。姿は見えないが、衣擦れの音や微かに聞こえる息づかいから、女性だと分かる。雨の夜になると窓をコンコンと叩き、入れてくれとせがむ。ある時Kさんが窓を開けて招き入れて以来、雨の夜には毎度尋ねてくるという。

封

古い屋敷の解体作業中に、Nさんがある部屋の畳を剥がすと、床には巨大な「封」という印が捺されていた。これは手を付けてはマズいと依頼主に連絡を取ると、当日のうちに作業は中断された。次にNさんが呼ばれた時には、その近辺から火が出て、屋敷は全焼したと聞かされたという。

小さな手の跡

雨の夜、バスの窓ガラスに目をやると、水滴で曇ってはいるがどこか変だ。手で拭くと、外側に脂でにじったような跡がついている。それは人間の親指よりも小さな手の跡だった。悪戯かと思ったが、停留所でバスを降りてよく見ると、バスの側面一面にぺたぺたと無数に付いていたという。

丑三つ刻

天井裏

風呂の天井から、天井裏に登るためのハッチがある。ある日、頭を洗っている時に、ハッチがズレていることに気づいた。「あれ、おかしいな」と思ったが、両手が泡だらけなこともあるし、後で何とかしようと思って頭を洗い終えた。見上げると、じーっとそこから何かが見ていたという。

階段の女

Nさんの話。ある雑居ビルに書類を届けに階段を上って行くと、マスクの女が踊り場に腰掛けて寝ていた。翌日そのビルに行くと、まだ座っていた。届け先で「階段の女の人、どうしたんですかね」と聞くと、「へ？」と返された。先日久々にそのビルに行ったが、まだ女は寝ているという。

廃病院

だいぶ古い話。池袋から早稲田への道に廃病院があった。夜な夜な変な気配を感じるので、気になって忍び込んだ。廊下には日本人形の首ばかりが無数に転がっており、診察室に散乱したカルテには解読不能な文字が書かれていた。気づくと真っ赤な姿の看護婦がいたので逃げ帰ったという。

強がり

「部屋で時々見るんですよね」とMさんは言った。風もないのにモービルが絡む。カーテンが外れる。額が落ちる。呻き声が聞こえる。金縛りが続く。「若い女性です。気を引こうと頑張ってるなんて、可愛いもんですよ」本人が幸せならそれで良いが、結ばれぬ縁なのは言うまでもない。

さようなら

学生時代に失踪したNからの留守電。「廊下に変な爺さんがいて、今何故かうちのドアの前にいるのよ。ドア鍵掛けたと思うんだけど。気持ち悪いんでお前んと...おいこらジジイ！来んな！」（騒音）そして電話口から「皆さんさようなら。N君さようなら」と変な口調の声がして切れた。

丑四つ刻

位牌の箱

Jさんの話。数年前に勤めていた雑居ビルの階段に、大量の段ボールが何年も放置されていた。役所から注意を受けたので整理をしていると、その中の一つに、古い位牌がぎっしりと詰まっていた。何所から来たのか誰も知らなかったが、社員の一人が「これのせいだ！」と叫んだという。

佇む男

長野県のあるダム湖で、早朝湖面に一人で佇む中年男性姿のお化けがいたという。釣りに来た男がボートから声を掛けたが、まるで無反応で、ただポーッと佇むだけだったという。自分がそこで何をしているかも皆目分からないようで、ボートの男が言うには昼頃にはもう消えていたという。

護り彫り物

K氏の実家の蔵に、桐の箱がある。その箱は開けてはいけないとされ、蔵の奥に仕舞い込まれていた。戦中、空襲で家が焼けた折、祖父がその箱を持ち出そうとして蹴躓いて落とし、中から布の様なものが飛び出した。彫り物の入った人の背中の皮だった。まだそれはK氏の家にあるという。

逃げるよ！

Yさんのお母さんが夜突如「逃げるよ！」と声を上げて起きたという。家族は「なんだなんだ」と言われるがままに家を出て、車に乗り、高速で家からずいぶん離れたところまで移動した。朝、高速のSAで見た光景は、ビルから火が上がっている姿だった。阪神大震災の当日の話だという。

人形写真

「変な写真なら、僕のところにも一枚あります」とKさんは言った。差し出された一枚の写真は古い白黒のプリントで、写っているのは、半透明の無数の不気味な人形の姿と、その中心でにっこりと微笑む少女の姿だった。「これ、僕のところに来た時には女の子しか写ってなかったんです」

寅一つ刻

軽くヤバい

Kさんの話。初めて降りた駅で、彼女に「改札に、いたよね？」と小声で訊かれた。黙って頷く。長いぼさぼさの髪。異常に大きな目の辺りが真っ赤に腫れている。女。改札の横から流れていく人の中に誰かを探している。「彼女もヤバいって直感したみたいです。あの存在感は軽くヤバい」

球状黒

高層マンションに住むIさんの話。真っ黒な何かが空の向こうから飛んできた。カラスかとも思ったが、どうも違う。球状の黒い毛の固まりだ。それは真っすぐ飛んできて、バン！と音を立てて窓に激突した。かなりの速度だったはずだ。それは方向を変えて、ヨロヨロと飛び去ったという。

バス停にて

Kさんの話。一日に数本しかない田舎のバス停でバスを待っていると、祖父とその孫らしき女兒が通りがかった。女兒は大きな声で祖父に話しかけている。その会話が耳に入って来てぎょっとした。「またヒト食おうねえ。とらえてワタぬいて食おうねえ！」ドキドキしているとバスが来た。

河原の足

Aさんが河原でキャンプ中、地面に置いた荷物を持ち上げようと屈んだ時、「何だ、これ」と思った。足だ。自分のすぐ脇に誰かが立っている。つい今まで一人だったはずだ。恐ろしくて頭を上げられない。目を閉じ、早く何処かに行けと祈った。次に目を開けた時には消えていたという。

がーこ

Bさんの田舎の子供は、川で遊ばないという。理由は「がーこ」というもののけが川に居るからだという。どこに住んでいるか分からず、いつもボロの服を着て、冬場でも一人で水に入って遊んでいる。人を見かけると背中に飛び乗り「いいいい」と笑う。釣り人が何人も見ているという。

寅二つ刻

ライブストリーミング

夜、近所の街角のライブストリーミングを見ていると、どこからともなく影がぐーっと伸びて来て、また縮んで消えるというのが繰り返されていた。どう見ても人間の背丈で出来る影ではない。数人でそのカメラのある場所に行って見てみたが、そんな影が出来そうな光源も無かったという。

黒い女

Eさんは狭い所が苦手だ。尋ねると、狭い所に一人っていると、黒い女が現れるからなのだという。エレベータの中や、トイレの個室、自家用車、そのような場所に一人っていると、死角から何時の間にかその女が現れ、真っ黒な顔に目だけを爛々と光らせてこちらをじっと見ているのだという。

うずくまる

Sさんの本家には、立派な仏間がある。子供の頃、夜中にそこでうずくまる人影を見たという。頭のとっぺんが禿げた男で、正座して土下座のように頭を地面に付けているが、腕は頭に隠れて見えない。「子供の頃にはわかりませんでした、あれは切腹かもしれない」とSさんは言った。

あめんぼ

Mさんが子供の頃、家には家族中で見えるのはMさんだけという「あめんぼ」と呼ばれるお化けがいた。あめんぼは手足が異常に長く、床をずるずると四つん這いで滑るように移動し、子供のMさんは、それが大層好きだった。しかし、小学校ぐらいにはもう家から消えてしまったという。

狸

夜、Jさんが山道を急いでいると、急に狸が飛び出してきた。避けようとハンドルを切ったが轢いてしまった。それから夜といい昼といい、狸の影が道に飛び出してくる。急ブレーキをかけるが、間に合わない。しかし、衝撃も姿も無い。余りに繰り返すので、ついにお祓いを受けたという。

やってくる話

「あっちからやってくる系の怪談は怖くないよ。だってどれも嘘だし」とHさんは言った。「それじゃ、本当に怖いのを話してあげるわ」と、Kさんが話し始めた。ああ、自滅するつもりだ。「それ」はKさんの所にやってくるのだ。横で聞いていた僕は、巻き込むことは無いのと思った。

柱の傷

Nさんの家では、真夜中に「ごつん」という音と共に、柱に傷が増えることがあるという。猫や犬のような動物の爪で付いた傷ではない。刃物で切りつけたような鋭い傷だ。中には数センチの深さの傷もある。何度引っ越しても起きる。「たぶん、いつか柱折れて死ぬな」とNさんは言った。

用水路の少年

子供の頃、Kさん達が用水路でザリガニ釣りをしていると、「こっちに来れる？」と、対岸から見たことのない少年に声を掛けられた。「ねえ、こっちに飛び越えて来なよ」少年は言うのと、にいと歯を剥き出して笑った。その歯がギザギザに尖っていたので、驚いて逃げ出したのだという。

廃屋の声

Tさんが高校生の時、仲間と夜の廃屋に行った。誰もいないことも確認して廃屋に入り、しばらく進むと、周囲で囁くように相談する声が聞こえた。耳をそばだてると、一時的に静かになる。震えながら進む内に「このまま帰していいものか」と言う声が聞き取れたので、逃げ出したという。

借り屋の怪

Eさんが子供の頃、家を建て替えの時に借りた家で不思議なことが起きたという。手を叩く音が聞こえる。誰もいないのに襖や障子が倒れる。その日も障子が急に「がたん」という音とともに外れて倒れた。その上に何処からかぱたぱたと血が降って、障子に花が咲いたようだったという。

寅四つ刻

プリントアウト

Aさんの話。真夜中にプリンタが動きだし、何かを印刷する音がした。だが吐き出された紙には何も印字されていなかった。気になったので、燃やしてみようと灰皿にその紙を置き、マッチで火をつけた。しばらくめらめらと燃えていたが、突然天井から女性の甲高い悲鳴が聞こえたという。

転がり婆

山梨県のある山道でのこと。Sさんが夜に自転車で峠を越えようとしていた。ヘッドランプの光の中に、一瞬何か場違いなものが見えた。倒れた老婆だ。老婆はごろんばたんごろんばたんと転がりながら坂を追いかけてきた。頂上まで思い切り漕いで、下り坂でようやく振り切ったという。

泳ぐ影

夕方自転車でIさんが走っていると、足元をゆら～りゆら～りと巨大なサンショウウオのような形をした影がくねっていた。驚いて相当ペダルを漕いだが、巨大な影がゆっくりと追いかけてくる。必死に自転車を漕いでも振り払えず、その影はトンネルに入ったところでやっと消えたという。

母の声

Cさんがパチンコ屋に入ろうとした時、「やめときな、負けるから」と背後から声がした。亡くなった母親の声に似ていたのでハッとして振り向いたが、誰も居ない。その日は負けた。別の日にまた同じ事があり、また負けた。次に「いい加減にしときよ」と声がしたので潔くやめたという。

おめでとう

Wさんは早くに両親と死に別れてしまった。ある夜、夢に曾祖父に曾祖母、祖父と祖母、父母までがずらりと並び、おめでとうおめでとうと口々に言ってくれた。感極まって涙を流しながら目が覚めた。横で奥さんが寝ていた。数週間後、奥さんから妊娠を知らされて得心がいったという。

戌一つ刻

幻の揺れ

第二夜の初端は「一粒怪談」の第一夜を眩き終わった直後の体験から。書き終わったと同時に天井からミシリミシリと音がして、その直後にガタガタっと部屋が大きく揺れた。慌てて地震サイトを見ても、地震は報告されていない。割と大きく感じたが、家族もぐっすり寝ているだけだった。

早口の子

「さんの家では、夜になると時々子供の声がある。二歳か三歳ぐらいの女の子の声で、聞き取れないような早口で眩くという。姿は見えない。一番最初に気づいたのは娘さんで、「誰かいるよ」と教えられたのだという。厄除けの札を貼ってみたが効果はなく、未だその声は収まっていない。

ピアス

Uさんが大学生の頃に体験した話。夜、アパートに戻って課題でもをしようかと、バッグから荷物を取り出していると、何かが机の下に転がった。何だろうと思って拾い上げてみると、見知らぬピアスだ。さらにバッグをひっくり返してみると、片方ずつのピアスが合計五つもあったという。

確かに

山陽地方のある路線での話。もうすぐ駅というところで列車が急停止した。「お客様へお知らせいたします。ただいま緊急停車いたしました。問題ありませんでしたので、運転を再開いたします」と車掌が言った。一番前の車両では、「確かに飛び込んだ！」と数人が騒いでいたという。

汗だく

学祭準備で遅くまで準備をしていたO君が、「汗だくだー」とプレハブの裏から出て来た。それを見た面々はO君の顔を見て「お前顔中血だらけだぞ！」と言った、O君は顔を拭い、「ええっ！」と絶句した。傷は無かったが、鉄っぽい臭いといい、血であることは間違いなかったという。

戌二つ刻

牛

雨が降る中、一人の女性がタクシーに乗ってきた。彼女は「小平まで」と言うと、寝息を立て始めた。暫くして「お客さん、どの辺ですか」と聞くと、目を開け、「牛」と小声で言う。

「牛？」「牛女が住んでいる家なんです。知りませんか」と言う。これはヤバイと降りして逃げたという。

こわいこわいいる

先程、娘に「パパこわいこわいいる」と言われた。ついに来たかと思った。前も百話を越えた所で来た。大人には見えないが、二歳児の目には怖いものが映っているようだ。「こわいこわいにバイバイして」と言うと、虚空に向かって手を振る。「行っちゃった？」と聞いたら首を振った。

iPhone怪談

iPhoneで怪談を書いている時にだけ日本語入力の挙動がおかしくなる。少なくともTwitterクライアントの挙動がおかしい。途中まで打った文字列が途中で消えたりもする。何度もそれで書き直す羽目に陥っている。こればかりは不便なので、近い内にお祓いを受けるつもりだ。

エスカレータの先

いつも使うエスカレータが止まっていた。人感センサになったのかと、近づいてみたが動かない。仕方なく歩いて上がった。上がった先の光景に違和感があった。繁華街なのに人がいない。建物の中にもいない。変だと思い、階段を急いで下ったら、エスカレータは普通に動いていたという。

目やに

Kさんの話。ある夏の日、うたた寝をした後に、まぶたが貼付いて開かなくなった。目脂のせいかと目を擦ったら、何かが剥がれる感触があった。目が開いたので、剥がれたものを見ると、真っ黒でパリパリに乾いている。その夏の間は何度かあったが、正体は未だによくわからないという。

戌三つ刻

悩みは同じ

「怪談を打っていると髪の毛が変に揺れませんか。誰かにいじられてるような感じ」「ああ、ありますね」「あと心臓が苦しくなったり」「それは僕にはありませんねー」「ああ、まだ良い方だ。でも子供が泣き始めませんか？」「あ、それはある」「可愛そうなんですよ」悩みは同じようだ。

青痣

Nさんが学生の頃の話。昼間、アパートで一人寝ていたら、トンッと胸の上に何か落ちて来た感触があった。目を覚まし、「何だ、画鋏でも剥がれたかな」と思って、周囲を探してみたが何も見当たらない。気のせいかと思ったが、夜、銭湯に行ったら驚いた。胸に掌型の青あざが残っていた。

便所神

Aさんの子供が小さい頃、「トイレに行きたくない」と繰り返しぐずったのだという。話を聞いてみると、トイレの天井におじいさんが貼付いていて、上から覗くのが嫌なのだという。こりゃ便所にいる神様かもしれないと、一度お酒やお米を奉ってからは、子供もぐずらなくなったという。

マリア像の写真

Jさんの家には、まだ小さいJさんが一緒に写ったマリア像の写真がある。しかし、家族の誰もそのマリア像を知らないし、Jさん自身も記憶にない。ある日、それを見た親戚の女性が、「これ、イタリアの○○聖堂のマリア様よ」と言った。当然Jさんはイタリアに行った事は無いという。

祖父の呪術

亡くなったAさんの祖父は、怪しげな術を使うことができたという。子供の頃、Aさんが悪戯をした後、「お前だろ」「違う」「嘘をつくな」「嘘じゃない」と問答になった。「嘘をついたら、口の中が砂だらけになる」と言われ、途端に口の中がじゃりじゃりとした。即観念したという。

戌四つ刻

鬼の顔

Mさんの話。昼間、八王子駅のホームで、スーパーあずさの到着と発車をいつもの様にぼーっと見ていた。発車ベルが鳴り、次第に速度を速めていく列車。「...っ！」最後尾の車内に一メートルはありそうな一つ目の鬼の顔があった。それと目があった瞬間、鬼の顔がニヤッと笑ったという。

擦り硝子ごしに

Hさんのアパートの話。外の廊下を、背の高い影が右往左往しているのが、磨り硝子ごしに見えた。誰だろうとHさんがドアを開けると、青い顔の友人がいた。「何外でぐるぐるしてるのよ」というと、「今、磨り硝子越しに背の高い影が行き来してるのが見えて不思議に思って」と言った。

からかわれている

一人暮らしのYさんのマンションでは、時々変なことが起きるといふ。先日はキッチンの入り口から白く細い腕がまっすぐに伸びていた。Yさんが近づこうとすると次第に引込み、キッチンに辿り着いた時は腕は跡形もなく消えていたという。「からかわれてるんですよ」とYさんは言った。

猫が猫が

昭和三十年代、N氏が小学校の頃、猫屋敷と噂の廃屋に探検に行った3人が戻らず、騒ぎになった。二人は近所の洞窟で見つかったが、「猫が猫が」と繰り返すだけで話にならぬ。残りの一人が見つかったのは二日後、遠く離れたH市で、猫の威嚇するような鳴き声を放つのみだったという。

座敷童

「うちには座敷童がいるそうです」とI氏は言うと、「今は下の娘にしか見えませんが」と付け加えた。何でも彼女が話せるようになる前からの友達で、何時の間にやら家において、一人きりの時に一緒に遊ぶのだという。I氏は「信じていれば会えるそうなので楽しみです」と言って笑った。

亥一つ刻

死神

忘年会の帰り、酔ったJさんは夜中の公園でうたた寝をしてしまった。その時、小柄な男から「このベンチは俺の席だが、別に寝たいなら貸してやるよ。でもあんた、死ぬよ」と言われて目が覚めた。「お前は何なんだ」と言ったら「俺は死神だよ、帰ってから寝な」と答えて消えたという。

盲目の老婆

小学校の頃に聞いた噂。夕方に現れて、自分の噂を聞いた子供のことを追ってくる老婆がいる。その老婆は盲目で、薄い生地帷子を着て、杖をつきながらゆっくり歩いてくる。逃げても直接家に来る。子供の家に上がりこみ、寝ている間に胸の上に座って笑う。大人には見えないという。

白蛇の祠

夜、雪の中に真っ白な蛇がいた。冬なのに蛇がいる訳が無いと思ったが、こちらを向いて鎌首を上げる。「こっちにこい」と頭の中に言葉が浮かんだので、こりゃ何かあるなと蛇の行く後ろについて行った。しばらく歩くと小さな祠が雪で崩れていた。処置をしたら、礼と共に蛇は消えた。

生霊の仕業

しばらく前からGさんは、いつも視線を感じると言っていた。最近「夜、何故か布団が暖かい」とか「留守の中、机の上の物の配置が変わっている」とやつれた顔で言っていた。相談された側が「ストーカーでもいるんじゃないの？」と噂していたが、実は生き霊の仕業に確定したという。

背中に乗せた人

「うちでは悪いものを背中に乗せた人が来ると子供が泣き出すのよ」と、Tさんは言った。「だから、怖い本とか好きだけど、最近は読まないようにしてるの」それでね、とTさんは続けた。「今日もあなたが来ると聞いて、子供が泣くこと泣くこと。よっぽど怖いものがあるんでしょね」

亥二つ刻

連鎖泣き

Kさんの話。子供を保育園に迎えに行くと、付近の園児たちが急に泣き出した。その場の大勢も泣き始め、保母さんがあやしても泣き止まない。そこに偶然園長が通りがかり、Kさんを見て手招きした。「凄いのを連れてきたね」と言うと、住職でもある園長が、その場で何とかしたという。

ドア二つ

以前にも出てきた不思議マンションのYさんの話。彼の住む部屋は、なぜか外に通じるドアが二つある。以前、片方のドアの下から蛇の尾が出ていたので、もう一つのドアに向かった。だが、そちらのドアからは蛇の頭が出ていた。どちらも半透明で、現実のものではないようだったという。

お盆の林檎

お盆になると、Dさんの家では季節外れの林檎を仏壇に供える。なぜなら、お祖父さんが亡くなった翌年、好物だったからという理由で林檎を供えたら、夜中にそれをシャリシャリと食べる音が聞こえたからだ。それ以来、もう十年以上にわたってお盆には林檎が供えられているのだという。

トイレの怪

Sさんの実家は中古のマンションである。そのトイレに入ると、Sさんの時だけひどく電球がちらちらするという。他の家族は誰もそんな経験は無い。ただ、Sさんの弟はそのトイレで般若面の女やうっすらとした女の影を見たことがあるという。Sさんが帰省するたびの悩みの種だという。

びっしり

Fさんの子供の頃、近所の林には悪い噂があった。同級生数人で、探検と称して奥へ進むと、背の高い木が周囲を囲う小さな広場に出た。嫌な雰囲気が出て全員が黙った。一人が「あっ！」と指差した先には、大人でも届かないような場所に藁人形がびっしりと打ち付けられていたという。

亥三つ刻

コートの子

新宿の地下駐車場に、コートの子と呼ばれる幽霊が出るという。深夜、巡回の警備員が駐車場の最下階を警備していると、ピチャンピチャンという水音がする。不思議に思い、その音がする方向に行くと、大きな水たまりの中央に、黒いコートを着た女がいた。声をかけると消えたという。

見回り

長期休暇中、大学に忘れ物をしたO君が夜に取りに戻ったが、建物は施錠されていた。守衛室で事情を話し、鍵を借り、暗い中を歩いていくと、廊下に懐中電灯を持った人がいた。見回りかなと思い、忘れ物を取った後で守衛室でその話をしたら、誰も見回りに出ていないと言われたという。

長靴

Mさんが親戚の葬式に行った時の話。夜、暗い廊下にごろんと子供用の長靴が転がっていた。何でこんなところかと思っただけ、通りがかった親戚のおばあさんが「これ、亡くなったHちゃんが穿いていた長靴よ」と言い出した。五十年以上前の物がなぜそこにあるか誰も知らなかったという。

みしりみしり

Kさんはお盆休みに家族が帰省している間、仕事を抱えて自宅で一人過ごしていた。夜遅くまで仕事をしていると、どうも自分の真上の部屋でみしりみしりと音がする。皆出払っているのに二階の部屋に人がいるはずもなく、恐る恐る見に行くと、白い人みたいなものが浮かんでいたという。

追い掛けてくる口笛

Tさんが大学で修論を書いていた時に遭遇したこと。夜、徹夜で論文を書いていると腹が減るので、コンビニまでカップ麺を買いに行った。買った帰り道、遠くから口笛が聞こえてきた。何かと思っていると、次第に近づいてくる。これは変だと逃げたが、研究棟まで追いかけてきたという。

亥四つ刻

うづくまるもの

Nさんの話。深夜誰もいないはずのワンルームマンションに帰って驚いた。真っ暗な中で、犬ぐらいの真っ黒な何かが、床にうづくまってビニール袋をガサガサと漁っていた。「誰？」と声をかけたら、すぐに音は止んだ。電気を点けてみたが、そんな音を立てるものは何もなかったという。

液状蟲

Oさんの話。列車で瓶を持ち歩く老人と相席になった。瓶の中は黒い液体。窓枠にそれを置いて暫くすると、中に大小の虫がわらわらと湧いた。老人がトンと瓶の底を打ちつけると、また黒い液体に戻った。「何ですか、それ」と訊くと、「あんたが知らんでもいいものさ」と言ったという。

もげるわよ

Uさんの話。夜中心と目が覚めた。え？ 横に人の気配がする。女だ。長い髪。自分の顔にその髪の毛が当たっている。常夜灯を灯しているはずなのに真っ暗だ。目が開かないのか。身体も動かない。その時女がくすりと笑った。「もげるわよ」 え？ 何が？ パニックになったという。

お連れさんの分も

Tさんの話。コンビニで弁当を買って帰ろうとしたら「お箸お連れさんの分もおつけしますか？」と聞かれた。「あ、いいです」と断って店を出が、あれ？ 一人で店に来ていたはずなんだけど、と不思議な気持ちになった。どうやらそのコンビニでは、よくそういうことがあるのだという。

探す影

Sさんの話。近所のマンションの入り口に、うす黒い影のような人が立っている。別段何をする訳ではないが、どうも人を探しているようだ。出入りする住人の顔を観察しているらしい。どうやらその人はしばらくすると他のマンションの前に立ち、またそこの住人のことを見るのだという。

子一刻

二年参り

Tさんの話。大晦日に二年参りをしに近所の神社まで行ったが、がらんとして誰もいない。鳥居を抜けようとしたら背中を引く者がいる。どきっとして振り向くと、枯れ木のような老人が立っていて、「あっちは去年だ。もう少ししてから出直してきな」と言って鳥居を抜けて行ったという。

トンネルの鳥居

Sさんの話。神社に二年参りに行く途中のトンネルでのこと。普段通り抜けようとしたら、トンネルの壁に灯がともる入り口があった。何だろうと思って覗くと、赤い鳥居が連なって奥に伸びている。興味を持ったが、友人との約束があったので通り過ぎた。帰りにはもう無かったという。

元旦の朝

Kさんの話。元旦、近所の神社に出かけたら、鳥居の先が虹色に光っている。なんだこりゃと周囲を見回すが、周囲の人は気づいていない。不思議に思ったがそのまま参拝を終えた。別の神社や個人宅の小さい社にも、眩しい光が見えたり、雲がかかっていたりと不思議な一日だったという。

僧形の男

Jさんの話。山道を歩いていると、僧形の男が降りてきた。珍しいなと思い会釈をしたが、Jさんを見無視するようにして下って行く。しばらく歩くと、また同じような僧形の男とすれ違った。その日は何度も僧形の男とすれ違ったが、その山には寺も無く、他にそれを見た人もいないという。

廃病院の足音

Tさんが高校生の頃、仲間と八王子の廃病院で肝試しをした。奥に進んで行くと病室や手術室などがあり、カルテや機材も散乱していた。よし帰ろうという時に、奥の階段の上から、コツンコツンと足音が聞こえてきた。ぞっとして急いで戻ったが、その足音は家まで追いかけてきたという。

子二つ刻

押し入れの音

Aさんが大学に入学し、六畳一間のアパートに住んでいた頃の話。時々夜中にドンドンと何か
が叩く音がする。寝ぼけながら何だろうと不思議に思っていたが、ある夜徹夜でレポートを書い
てる時にその音がして飛び上がった。押し入れが内側から叩かれていた。しかしすぐ慣れたと
いう。

戻ってくる自転車

ある夜、酔ったKさんが駅に放置された自転車に乗って帰った。一週間ほど放置されていたし
、明日また駅まで乗って行けばいいと考えたという。しかし夜に自宅に戻ると、ガレージにその
自転車があった。結局何度乗り捨てて帰っても家に戻って来る。最後はパーツに分けて捨てたと
いう。

足下の人形

N氏の話。夜中に目覚めてトイレに行こうとベッドを下りて違和感を感じた。足元に人形が立
っている。寝ぼけ頭で子供が悪戯したのかなと思った。だが冷静に考えると、人形が支え無しで
立てるはずがない。首を傾げつつトイレのドアを開けると、そこに先ほどの人形が立っていたと
いう。

廃屋写真

大学生のM君の話。友人と東京都と山梨県との境の山中にある廃屋に行こうという話になった
。夜、二人で車に乗って行ったが、余りにも怖くて入る勇気が出ない。そこで写真を撮って帰
った。家で写真を確認すると、全ての窓という窓から、こちらをじっと見ている顔が写っていた
という。

窓を叩く音

Kさんの家では、夜中に一人で起きていると、色々なことが起きる。先ほど電話中も、窓をコ
ンコンコンとリズムカルに叩く者がいると言っていた。窓のずっと下の方を、軽くノックするよ
うだ。以前も同じような音がしたので、窓を開けて確認したが、結局原因はわからなかったと
いう。

子三つ刻

正座列

クラブ活動の帰り、Sさんは近道しようと墓地を通ることにした。既に陽は落ちたが、まだ夜には早い時間。友達と携帯でメールをしながら通り抜けようとして、はっとした。薄黒い人影が墓石の前でこちらを向いて正座していた。どの墓にもいる。泣きそうになりながら駆け抜けたという。

針刺し

Iさんの祖母の話。ある日夫が針刺しを持ち帰った。その夜から夢に老女が現れ恨み言を言う。夫に問うと、「欲しがってたから古道具屋からもらった」と言う。返ってきて、欲しがってただと喧嘩になった。その時、バリッと針刺しが破れ、中からあり得ない量の髪の毛が落ちたという。

トランプ

Nさんの話。トランプをシャッフルしていたら、不意に指先に痛みを感じた。「痛っ」と声を上げると、「今の何!」と二人の友人が駆け寄ってきた。「何って、何?」とNさんが問うと、二人はトランプの隙間から3本指の白い手が出て、Nさんの指を引っ掻いたのを見たと言ったという。

タイヤと腕

Kさんが幼い頃、近所に古タイヤが沢山ある公園があった。友達と遊んでいる時、タイヤの一つに白いものが入っているのが見えた。友達を呼び、木の枝で引き出してみると、真っ白で人の腕の形をしていた。怖いので皆でKさんの母親を呼んで公園に戻ったら、もうそれは無かったという。

自分の気配

都内で一人暮らしをしているSさんが帰宅すると、部屋が暖かい。朝出るときに暖房切り忘れたか?とも思ったが、暖房は切れている。おかしいなと思いながら、もう寝ようと寝室に行くと何か妙だ。暗い部屋に人の気配がする。恐る恐る電気を付けてみると自分がベッドに寝ていたという。

子四つ刻

ゆで卵

Tさんが高校生の頃の話。ラーメンに入れようと思い、ゆで卵を作った。出来上がってまだ熱いそれを水に浸し殻を剥く。ラーメンも出来上がり、さあ食べようと、卵を包丁で半分に切ろうとしたが、何か固いものに当たった。石？ 白身を崩してみると、青い虹彩の義眼が出てきたという。

キャッチボール

先輩のSさんの話。川原でキャンプ中、夜テントの中で休んでいると、急に空気が冷たくなって目が覚めた。その時、外でスパーンと音がした。ミットで速球を受けたような音だ。少ししてまたスパーンと音がした。キャッチボール？ だが深夜の川原だ。明け方までその音は続いたという。

失踪文庫

「どこ行っちゃうんでしょう」とKさんは言った。彼女は怖がりだが怪談好きという変わり種で、怪談本も時々買うのだという。「でも消えちゃうんです。一年に二冊ぐらい買うから家に十冊ぐらいあるはず。でも一冊も見つからないんです」と言った。勿論捨てたりした覚えもないという。

プール

例年行く合宿所が改築というので、Kさんの属する水泳部は、プールが近所にあるホテルを探して合宿をした。新しく綺麗なプールで、最初部員は皆喜んだが、どうも奇妙だ。「練習していると誰かに足を掴まれた」という部員が出始めた。他にも長い髪の毛が足に絡むこともあったという。

居酒屋

旅先でTさんが友人と寂れた居酒屋に入った。座敷に通されて、「時々変な音がするかもしれませんが、気にしないでくださいね」と言われた。何その変な音って、と笑っていたが、風もないのに障子が不規則にガタガタ揺れ、さらに生木の裂けるような大きな音が店に響いて驚いたという。

丑一つ刻

竹串

N県のFさんの話。雪の降った翌日、お母さんと二人で自宅前の雪かきをしていると、「何よこれ」とお母さんが呟いた。見に行くと、異常な本数の竹串が雪に刺さっている。十本や二十本ではない。見たところ数百本は刺さっている。一晩で誰が何のためにやったか全く分からないという。

こっちで休め

夏に泥酔したKさんが家に帰る途中、駅のベンチで寝転んでいると、「そんなところで寝てたら眩しいだろう」と声をかけられた。「こっちで休むといいぞ」と、言われるままにベンチから移動した。親切な人もいるもんだと、言われた場所で横になった。目が覚めたら踏切で寝ていたという。

バージンロード

結婚式当日、Kさんは足を骨折していた。これではウェディングドレスでバージンロードを歩くのも松葉杖かと思ったが、式当日の朝は不思議と足が軽く、普通に歩く事ができたという。不思議に思ったが、その時、亡くなった祖母のイメージが浮かんだ。翌日には痛みは戻ってきたという。

電話ボックス

Oさんが中学の頃、近所で友人とサイクリングをしていると、友人が「あの電話ボックスに首なしの人がいた！」と騒ぎだした。戻ってみても誰もいない。友人と二人して見間違いだということにして帰宅した。翌日学校でその話をしたら、その電話ボックスの幽霊は有名な話だったという。

整理整頓

Yさんの話。仕事を終えて帰宅すると、どうも様子がおかしい。一人暮らしのYさんの部屋は、朝家を出る前は散らかっていた。それがきちんと整理されている。隙なく整った部屋の中心に机があり、その上に水の入ったコップが一つ置かれていた。周りに聞いてみたが、誰も知らないという。

丑二つ刻

椅子

一人暮らしのNさんが、ベッドに入って電気を消し、もう寝ようとしていると、隣の部屋からズブズブと椅子を小刻みに動かす様な音がした。え？ 何の音？ と不思議に思ったが、急に眠気が来たので無視して寝ることにした。翌朝、揃えてあった椅子は、全て窓際に移動していたという。

電線

Mさんが急いでいる時に限って、玄関の所でコンセントから伸びる電線に足を引っ掛けてしまう。「嫌になっちゃう」旦那さんにそう言うと、「そんな電線無いよ？」と言われた。そんな馬鹿なと確認してみたが、やはりそんな電線はなかった。今でも急いでいる時には引っかかるという。

雪の夜

十年程前、W氏が車でN県に向かう最中、行き倒れの老人を見て、車を停めた。携帯から119番して待ったが、救急車が来ない。「寒い寒い」と繰り返すので、後部座席に寝かせ、毛布をかけ、近くの病院まで届けることにした。病院に着くと、毛布の下は雪の山に変わっていたという。

質問

去年の夏に体験した話。大学が休みの間に、自分以外は無人のはずのPC教室で採点をしていると、教室の後ろの方で誰かが挙手している。いつの間に誰が入ったんだろう？ 学生はいなかったはずだが。気づかない間に入ったのか。質問かな？ と、その席まで行ったがやはり無人だった。

追い掛けてくる湯気

カップラーメンに湯を注ぎ、蓋をする。蓋の間から湯気が溢れる。その湯気が自分の方に向かって漂ってくる。不思議に思い、違う方向に逃げても、湯気はそちらに追いかけてくる。どちらに身体を置いても、ずっと追いかけてくる。そうしているうちに3分経ったが、不思議な体験だった。

丑三つ刻

見るも叶わず

知り合いのアパートに「出る」と聞いて、Aさんを含む3人の男が泊まりに行き、酒を飲みながら話をしつつ夜半を迎えた。不意に蛍光灯がチラチラと瞬き、キーンという高周波が聞こえた。「来たな」と誰とも無く言った直後、頭に衝撃を受けて昏倒した。朝まで目が覚めなかったという。

ぞぞ

Nさんが風呂で座って頭を洗っていると、背後に気配を感じた。シャワーを止めて耳を澄ますと、床のあたりからぞぞ、ぞぞ、と微かな音がする。背筋が凍ったが、シャワーの水勢を最大にし、顔に付いた泡を流して振り返った。排水溝から大量の真っ黒い泡が流れて行くのが見えたという。

緑の顔

Tさんの話。ある夜、寝る前に電気を消し、ベッドに入って携帯ゲームをしていた。彼女のベッドは組み立て式のロフトベッドで、大人の背ぐらいの高さがある。真っ暗な中、ふと気配を感じてベッドサイドを見ると、緑色に鈍く光る女の顔が、闇の中でこちらを見ながら浮いていたという。

合宿所の少女

ある高校で、バトミントン部の合宿があり、合宿所でTさんの後輩が食事を作っている最中のこと。包丁で野菜を切っていると、後ろからエプロンの端が引っ張られた。何かしらと振り返ると、女の子が立っている。こんな所に女の子が？ と思ってもう一度振り返ると消えていたという。

記憶混濁

そのバトミントン部の合宿中、女の子が「出た」時刻に練習をしていたグループの話。ダブルスの練習中に、一人の先輩の動きが止まってしまった。「先輩、サーブですよ！」と声がかかったが、「サーブって...なんだっけ」と言って意識を失った。後で聞いてもその時の記憶が無いという。

丑四つ刻

中央分離帯の女

高速道路を車で走っていると、中央分離帯に女性の黒いシルエットが立っているように見えた。「あれ、やばいぞ。飛び込んでくるぞ」と助手席のJさんが言う。近づいていくと、やはりシルエットは女だということがはっきりした。その時、Jさんの言葉通り女は道路に飛び込んで消えた。

隧道雪

車でトンネルを走行中、「トンネルの中に雪って降らないよな」と運転席のTさんが言った。「当たり前じゃないですか」と言うと、Tさんは深刻な顔で、「後ろの窓見てくれ」と続けた。振り返ると、リアウィンドウにうっすらと雪が積もり、しかも少しずつ白さが増していきのが見えた。

靈感

O大学のKさんの話。大学で数人で集まってレポートを書いていると、友達がトイレに行くとき席を外した。彼女はすぐ戻ってきて、「あのトイレで人死んでるでしょ!」と言った。その時は知らなかったが、その後、卒業生から話に聞くとところによると、そこで以前自殺があったのだという。

夫婦喧嘩

Hさん夫婦が旅先で喧嘩になった。それは助手席に乗った奥さんが、雪の降る高速道路の路肩を、老人が古い自転車のペダルをゆっくり漕いでいるのを見たと言ったからだ。Hさんはそれを聞いて「そんな馬鹿なことがあるか」と返したが、奥さんは譲らない。それで喧嘩になったという。

高速ラジオ

夜中、高速道路を走っていると、急にラジオの電源が入った。最初はノイズが聞こえていたが、次第に集団でお坊さんがお経を詠んでいる声が流れてきた。ナレーションも無くずっと流れているので、変なラジオだなあと思い、電源ボタンを押したら、ハイウェイラジオが流れ始めたという。

寅一つ刻

雪だるま

Bさんが数年前に体験したこと。日本海側のある県で、雪の強く降る中、深夜の高速道路を走っていると、中央分離帯に雪だるまが置いてあった。高さは30cmほどで、そんなに大きなものではないが、一体何故、誰が、いつそんなところに雪だるまを置いたのか、全く分からないという。

ナメクジ

明け方、冷たい雷雨が吹きすさぶ強風の中、Sさんがアルバイトに出かけるために急いでいると、人間の腕ほどもあるナメクジのようなものが、道の端にうようよとしていたという。余りにも気持ち悪かったのでバイト先で話に出したが、そんなものいるはずないと一蹴されただけだという。

赤い爪

Kさんの部屋には、爪が落ちていることがあるという。それだけなら自分の爪を切ったときに飛ばしたものだだろうと考えることもできるが、その爪の色は真っ赤で、長さも2cmぐらいある。Kさんは男性で、マニキュアをしたこともない。心当たりのある人もいないので気持ち悪いという。

三本

Kさんは廃墟巡りが好きで、ある時、東北のある廃屋に忍び込んだ。その廃屋は、奇跡のように誰にも荒らされておらず、うっすらと生活感を残したままだった。その台所に箸が立ててあった。それを見たKさんは、不思議に思ったという。全ての箸が三本ずつでセットになっていたからだ。

ホテル廃墟

廃墟巡り好きのKさんから聞いた話。北関東のホテルの廃墟での事。ある部屋に入ると、割れたガラスが散乱していた。その破片の散乱する中心に、女の子の靴が置いてあった。刹那、同行の一人が声を上げた。後で聞くと、その靴のあった場所に幼稚園児ぐらいの女兒が立っていたという。

寅二つ刻

影無し

数年前、都内のある駅でのこと。夕方、ホームに強い西日が入ってまぶしいほどだった。駅のホームを歩く人々の足下に濃い影が伸びている。「あれ？」 Tさんは声に出してしまった。その中の一人だけ、足下に影が無い人がいた。それは二十歳過ぎぐらいで、学生のように見えたという。

面

Kさん一家が旅行先である旅館に泊まった夜、Kさんがふと目を覚ますと、横で寝ているはずの娘さんの顔に、もう一つ女性の顔が重なるようにしてKさんを見ていた。思わず息を飲み込む。その顔は次第にノイズが乗ったように曖昧になり、最後には娘さんの顔だけに戻って消えたという。

秘密の広場

Hさんが子供の頃、近くの山に秘密の広場があった。木々の間に広場と土に埋もれた石組みがあり、よくそこで遊んだ。ある日広場に行くと、真っ白い見たことの無い動物がいて、今から遠くに行くから、もうここは入れなくなると告げた。翌日からそこには行けなくなってしまったという。

西洋人形

都内の女子大に通うKさんの話。子供の頃、テレビの心霊特集を見ていたら、呪いの人形の話があったという。それを見ていて「うちにもこんな人形あるよねー」と言っていたら、棚の上にある西洋人形が、次々と倒れて棚から落ちたという。それ以来、西洋人形は見るのも怖いのだという。

限定降雪

Yさんが子供の頃住んでいた町の外れには森があった。ある冬の大変寒い日、Yさんが「雪が降らないかな」と思いながら下校していると、その森の方から雪混じりの風が吹いてきた。だが周囲に雪の気配はない。風の吹いた方に行くと、その森の周囲だけ雪が積もるほど降っていたという。

寅三つ刻

バーベキュー

Mさんが仲間と河原でバーベキューをしていると、知らない男の子が周りをうろうろしている。近所の子かなと思って声を掛けずに放っておいた。帰りがけに「あの子いつの間にかいなくなったね」と言うと、仲間は皆不思議な顔をして、そんな子どもにもいなかったぞと言ったという。

大草原

Gさんは都内の大学に通っている。ある日、大学からの帰り道、近道しようと知らない路地に入った。真っ直ぐな道を自転車で進んで行くと、左右の家も疎らになり、ついに地平線まで見渡す限り何もない草原に出た。そのあり得ない光景にぞくっとして急いで元来た道を引き返したという。

落とす

ずいぶん昔に聞いた話。Y県のある駅に、赤ん坊を抱えた女性の幽霊が出るという。階段を下りた先に佇む彼女と目が合うと、にやっと笑い、赤ん坊を抱えた両の腕を離す。赤ん坊は腕を離れ、ゴンと重い音を立てて床に激突する。あっけにとられていると、その女性はすっと消えるという。

知りませんか

部活を終えたNさんが自転車置き場に行くと、ぼろぼろの乳母車を押す中年女性が佇んでいた。女性はNさんをじっと見て、「私の赤ちゃんを知りませんか？」と言った。Nさんは「知りません」と即答して逃げるように帰った。Nさんの高校に伝わる怪談と同じなので大変怖かったという。

捨て子

Tさんのアパートに差出人不明の手紙が届いた。開くと便箋に「よろしくお願いします」とあった。不思議に思ったが、心当たりも無い。だが、その夜から赤ん坊の泣き声が聞こえたり、壁に子供の手形が付いたりと不思議なことが続く。お祓いにも行ったが、神主に渋い顔をされたという。

寅四つ刻

不揃い

Kさんの実家にある蔵から、古いお札が貼られた茶箱が出てきた。不思議に思い、近所の寺の住職立ち会いのもとに蓋を開けることになった。すると、中から江戸期のものと思われる草履や下駄が大量に出てきたが、どれも片側しかない。なぜそんなものが蔵にあったか由来も不明だという。

パチンコ屋にて

Bさんの話。パチンコ屋でのこと。島の端の台に、どうも暗い雰囲気の方が座っている。だが台を打っている様子が無い。知り合いの常連にその話題を振ったら、「ああ、あの台ね。時々見る人がいるみたいだけど。あいつ、パチの借金で自殺してっから」とあっけらかんと言われたという。

シャワー

Gさんが夏にパソコンに向かって怪談サイトを見ていると、風呂場から物凄い水音が聞こえた。驚いて見に行くと、シャワーの水栓が全開になっている。Gさんの家は水流が極端に強く、全開にするのはあり得ない。Gさんは一人暮らしで、その夜も部屋で一人切り。今でも不思議だという。

水臭い

Yさんの結婚式の日、無事に結婚式と披露宴を終えた後、参加してくれた人々を見送る段の話。何人もの参列者から、前年亡くなったYさんのお母さんが会場にいたと言われたという。Yさんは二次会で「水臭いっらないよな」と言っていたが、その夜夢に現れて祝福してくれたという。

あてるひと

Aさんの伯母さんは生まれてくる子供の性別をぴたりと当てるらしい。しかも、まだ授かってもない子供の性別をだ。Aさんも過去に占ってもらい、その予言通り、去年の夏に性別の違う二卵性双生児を生んだという。旦那さんにもその事は告げており、色々と準備も出来ていた様である。